

第4回  
乳幼児の育ちを考える  
～人格を育てる保育者の仕事～



講師 岡村 由紀子 氏

1 はじめに…人間が人間になるために

これからお話することは、子ども達と出会って、子どもに教えてもらったことが多いです。実際にいる子どもの姿を見ながら、何が大事かということを探しています。

私達の仕事は、子どもの育ちを考えます。働き掛け、つまり指導があって子どもを変えることが、教育・保育の営みです。例えば、実習生が保育計画通りに遊びが展開できなかつたと振り返ったとします。しかし、保育が子どもの育ちにどう影響したかを見て取るということが実習記録だと思うのです。計画通りにいったかどうかの振り返りでは、子ども抜きの保育になってしまいます。私達は、生産労働者ではなく、人間を育てています。まず入り口に、人間とは何かを哲学的にも学んでいくことが、保育を変えていきます。

(1) 人類学…分かち合う・想像性

園で野菜や稲を栽培し収穫したときなど、みんなで育てた野菜やお米を分け合う経験をします。一握りのお米を10人いたら10人が食べられるようにするにはどうするか、自分だけが食べたいというのではなく、相手のことを考え、分かち合うことができるのが人間です。

(2) 教育学

1つ目に、みんな違っているということが言えます。だから、思ってもみないことが起こるのです。傘をさすときに相手にぶつかってしまったとき、「向かいに友達がいたね。今度から見て、傘さそうね。」こうした日常の何気ない中に学ぶチャンスがたくさんあります。そこで学んだ子は、保育者がいなくても自分で考えて

動くことができるようになり、人の話を聞く力が育ってきます。私たちは、未来に生きる子どもにも働きかけています。

2つ目に、人は自ら変わるもので、ずっと同じ子はいないと言えます。保育者は、子どもが自ら変わろうとしたくなる環境を用意していくことが求められます。

3つ目は、仲間を求めるということです。だからこそ、友達を叩いたり意地悪したり、トラブルがあるのです。仲間を求めず一人遊びをしている子には、自ら友達のもとへ行きたいと思える環境を作ります。やりがちなのは、「ほら見て。〇ちゃん車で遊んでるよ。」と知らせることですが、これでは自ら変わることはありません。子どもが自分で変わろうと思えるようにすることが大切です。夜遅く帰ってきた思春期の子に「待っている間、ずっと心配だった。せめて、遅くなることを伝えてくれれば、お母さんは安心なんだよ。」と伝える方が、人が動きます。それを、私達は一人でやるのではなく、チームで困っているところを補いながら行っていきます。

(3) アタッチメントの考え方の基本

『人は一人では生きていけない。だから困った時は、助けを求めよう。そして、お互い助け合って生きていこう。』

アタッチメント入門講演会 遠藤俊彦 (東京大学)

0歳児の前半は、アタッチメントの前のジョイントネスという考え方をします。ジョイントネスは「繋がりたい」という意味があり人間の脳の中にインプットされています。家庭では、

母親だけではなく父親も触れ合うことにより、繋がり合い、心と心が繋がる豊かな感情が生まれます。最初に「愛を伝えるところ」は、一般的ですが、共感的・安定的等の条件を持つことで、保育者もアタッチメント対象となり、保育の営みの大切さは、大きいと言えます。

## 2 教育・保育とは何か？

～人格の形成・体と心の主人公になる～

教育・保育の目的は、子ども自身の中に「人間らしく生きていく力」を育てることです。保育者との信頼関係を作る中で、可能性に働きかけます。保育とは、擁護性（自立する基本的生活力）を育てながら人格を形成すること、人生の主人公として生きていく力を育てます。

## 3 子どもはいたずらや失敗や間違いをしながら大きくなる

私達は、子どもの身体と心の育ちやバランスを知ることが大事です。何歳だからこうだということではなく、目の前にいる子ども達の姿から考えます。一方的な大人の願いでは育ちません。

「子どもの身体を知る」ことの例で言えば、例えば排泄の自立です。自立の条件がそろったら、「おしっこ出る子いる？」と、自分の身体の変化に気づけるような声かけをします。個人のリズムで自立へ向かえるようにしていきます。

もうひとつ、「子どもの心を知る」ということが大切です。子どもの心理は「いや」「自分で」から始まります。大人の言う通りになりたくないという独立宣言です。そのときは「何かお手伝いすることある？」と聞き、ズボンをはくを手伝い、手を貸しながらもできたとき「自分でできたね」と言ってあげるのです。それは、かけがえのない自分、自尊心、自己肯定感、自分を大事にする心に繋がっていきます。

自分でできるようになるということは、自由を獲得するという事です。保育者にズボンをはかせてもらうのではなく、自分でズボンをはくことができれば、自ら園庭に出ていけます。私達は子どもが一人の人間として、意欲的に自立するように育てたいのです。

また、遊びとは面白さの追求です。子どもが遊びのどこを面白がって遊んでいるのかを丁寧に見る事が大切です。保育者は、子どものせいにならず、子どもが楽しいと思う遊びの工夫を次の日に生かしていきたいです。保育者も日々の保育の失敗から学び、子どもと応答的に保育を創造していきましょう。

乳児期であると、相手の気持ちにまだ気づかず友達の玩具を取り合うこともあります。取ったほうは取ったことがよくないことだとは思っていません。そのときに保育者は教育として、「欲しかったんだね。」「でも〇ちゃんも使いたかったんだって。泣いているね。」と伝え、「次は貸してって言えるかな」と仲介することが保育です。子どもの行為には必ず訳があります。

こうして、一人一人の人格や子どもの中の子どもらしさを大事に、自己主張、他者理解をしながら、一緒に合意形成して仲間と育ち合っていくことが保育です。時間がかかっても、話し合っ語りぬいて解決していくことを伝えていきたいです。

## 4 子どもの権利条約

子どもにとって、泣くことが生きる権利の第一歩です。この視点があると、保育が変わります。泣いて大人を呼び寄せ、ミルクをもらい「おなかすいたかな？」「おいしいね、おなかいっぱいね。」と世話をされることで「泣いていいんだ。」という自己肯定感の土台が育ちます。

条約の中で、最も多く使われる言葉は、「子ど

もの最善の利益」です。利益を英語で言うと Interest、すなわち興味・関心をもって、遊び学ぶ、ということが子どもの権利だということです。遊びに入っていない場合は、子どもの興味・関心はどこにあったのか、自分の用意した環境はどうだったかを考えます。保育者が、子どもに権利があるという視点をもつことで保育は豊かになります。

## 6 家庭で育つ力と集団で育つ力

家庭で育つ力は「無条件に愛される」という経験です。それは基本的信頼感に繋がります。

一方、園で育つ力は「たくさんの憧れが育つ」経験から得られる、集団的な濃密経験（社会的信頼感）です。

例えば絵本『かいじゅうたちのいるところ』には文字がないページがあります。一人で見ていると気が付かないことも、集団で見ると世界がどんどん広がります。「あれ！しっぽがある。こっちはない」等たくさんの友達の発言があり、他の子への憧れはいろいろな創造性を創り出します。その後、かいじゅうになりきって、踊りを踊ったり劇遊びをしたり発展していきます。

保育を作る時に、一人一人の中にある興味・関心を見て取ることが大切です。運動会があるからやらせるのではなく、「運動会をやる」「やりたい」と思う主体性や意欲を育てる指導が中心になります。絵本を読んでいて赤ちゃんが、「もう1回もう1回」と言ったら、その指導は子ども達にとって楽しかったということです。

ルールのある遊びは、ルールを守らせることが大切なわけではありません。大人がルールを決めて行い、この子はルールを守らないからこの子はやれないというのではなく、子ども達と〇〇園〇組のルールを相談しながら自分達に合ったルールを作ることが面白いのです。遊びの何が面白いの

か、構造化を考えながら保育を考えていくことが大事です。構造化の例では、跳び箱は、自分の体が空中に浮くことが楽しいという経験があって本来の面白さがわかります。乳児期から高い高いしてもらおう等、楽しさを経験することが必要です。

## 7 乳幼児期に大切な

アタッチメント形成とパートナー

### (1) アタッチメントとは

子どもが危機的状況や不安なとき特定の対象との近接を求め、助けてもらうことで自分の生存と安全を確保し、安心感を得ようとする性向です。赤ちゃんは泣いて、抱っこしてもらうことなどで安心感を得ます。それは、人間に対する絶対的信頼感・自己信頼感の形成の始まりです。

愛着の対象は心理的拠点となり、探索活動が活発になっていきます。子どもが母親に抱っこされて、まず安心を得た後、母の膝から自ら立ち上がっていくという行動があって初めて、アタッチメント形成といい、自立の形成ともいいます。そして、大好きな人と関わる楽しさは、人と関わる力の土台となっていきます。3歳くらいになると、心理的に内在化し、生涯にわたる絆となります。身体のくっつきから、精神的なくっつきへと変化していきます。

### (2) 保育者の質

子どもの活動は目に見えます。保育者に必要なことは、「やりたかった？」「どうした？」と言葉を引き出しながら、見えない子どもの気持ちを想像することです。そして、保育を創造的に作り出していく力が大事です。また、子どもの要求や状態に敏感であり、共感性・応答的・継続的・一貫性・情緒豊かであることも大切です。

更にアタッチメント対象は大人だけではな

く、子ども集団の存在も大きく影響することから、保育・保育者の質が問われます。

#### <事例> 0歳児「さきちゃんの笑顔」

園を長期休みしていたさきちゃん（11ヶ月）が久しぶりに登園しました。休みの間に2人の新しい友達が入園し、園に慣れず大きな泣き声が響きわたっています。休み前のクラスの雰囲気との違いに、さきちゃんはボー然として表情も硬く、笑顔が消えてしまいました。最近いい笑顔だったのに、この雰囲気ならびっくりするのは当たり前。どうしたらさきちゃんが笑顔になるだろう…と保育者は思いつつも、手が離せず、そばにいる事ぐらいしかできませんでした。そんな時、しゅんとちゃんの顔を見て、さきちゃんはホッとしたようなニッコリ笑顔！！

さきちゃんの笑顔にしゅんとちゃんは嬉しくなったのか、柱に隠れたりして、「いないいないばあ」。2人でケラケラ笑いあっていました。（途中略）

#### 【担任考察】

4月から一緒に保育園で生活している2人。「0歳児でもこんなふうに安心する気持ちの関係ができるんだ！」という発見に驚きと喜びを感じました。子どもの心のピンチを救うのが子ども同士なんていいなと思いました。

子ども同士の関わりの中にも、安心する気持ちの関係があり、それが意欲や自立に繋がることがわかります。

#### (3) 保育指導の基本

「共感・一方的ではなく子どもの思いを聞いて、応答的指導・大切にされる経験・夢中になる楽しい遊び」です。

親と離れて生活する集団生活であっても、個が大事にされ居心地がよく安心して生活するとき「自分は自分でいいんだ」の心が育ち、体

と心の主人公になる自己肯定感が育ってきます。こうしたかけがえのない人間関係作りが大事です。

#### 8 終わりに

0歳児は泣くことから始まり、全てを愛される経験をします。1歳児では、「イヤ!」「自分で!」から始まるややこしい思いを分かってもらえる時期です。2歳児は、やりたい事が膨らみ、「かみつき・叩く」ことが多くなりますが、思いを支えてもらう経験もします。3歳児は、人の関心が高まりケンカから始まり、友達を知る経験をします。4歳児では、「好きだから・楽しい」から始まり、我慢する経験をします。5歳児では、「恥ずかしい・怖い・苦手」から始まり、違うことを認め、新しいルールを創る経験をします。友達と一緒にいるのが楽しく、好きと感じる経験をします。

こうして、体と心の主人公になる「乳幼児の充実」期を過ごし、次の就学期に向かっていく時代。どの時代の「今」も大切で、それがマイナス的な事柄であっても、そこに教育的営みがある限り、子どもは体の中に記憶を残し、次の時代の豊かな「今」を創り出す力になっています。

子どもが表すどんな姿や言葉にも意味があり、大人へのメッセージなのです。保育は「今をとびきり楽しく!」と営まれています。それは「過去」「今」「未来」が繋がっている「今」です。

子どもの心と、気持ちが通い合うとき、保育は楽しくなります。

第4回 焼津市保育者資質向上研修会  
令和5年9月22日（金）（抜粋）  
会場：焼津市役所 会議室1B